九州肥筑方言に於ける数量関係の副詞語彙に認められる修飾発想法

井　上　博　文

はじめに

外界の数量を認識、表現する言語形式の一つに、数量関係の副詞語彙がある。この数量関係の副詞語彙は、述部の動詞を修飾・限定し、数量の程度性を明示する。統語論的には、連用修飾部に立つものである。

社会的な存在である言語主体は客観世界をどのように、そしていかなる仕方で切り取って言語化しているのであろうか。この客観世界の切り取り、そして語を造り出す方法を、いま造語発想法[※1]と呼ぶことにする。連用修飾部に立つことを専らとする副詞に認められる造語発想法を修飾発想法として捉えて、その修飾発想法を検討することは、客観世界と言語との間にある言語主体の認識に迫る一つの重要な視点ということができよう。すなわち、数量関係の副詞語彙に認められる修飾発想の分析によって、地域社会に生きる人々のものの見方、捉え方、感じ方の一端が浮かび上がってくると予想される。修飾発想をこのように考えることによって、語彙の質的な側面である意味構造とこの意味構造を具体的に実現している語構成、さらに量的な側面である量的構造とが修飾発想の観点から統合されることになる。

副詞語彙における修飾発想からの研究は、主に、室山敏昭『方言副詞語彙の基礎的研究』や『内海文化研究紀要第四号　瀬戸内海域方言の副詞語彙の研究』に於いてなされている。これらに於いては、①量的構造の観点から、特定の意味分野への量的なかたよりが認められること、②語詞形成上の特色などについて重要な指摘がなされている。しかし意味構造上の問題について、十分な検討がなされていない点や個々の事象についての検討の段階であり、一般的な法則を見出すまでには至っていない点など、まだ問題が多く残されている。個々の語を取り上げて、その造語発想を分析することから、さらに語彙のまとまりを対象とすることが必要であり、ひとつの意味分野全体にわたるような統一的な法則を帰納することが大切であると考えられる。

数量関係の副詞語彙に見られる修飾発想法を検討していく方法として、意味構造のレベル、語構造のレベル、量的構造のレベルの三つのレベルに分け、それぞれについて検討し、導かれた結果を統合することが有効であろう。このうち、量的構造のレベルは他の意味構造、語構造のなかに認められるものであり、また、意味構造と語構造とが密接にかかわりあっていることはいうまでもない。

資料

本稿で用いた資料は、以下の8地点[※2]での調査表を用いた調査で得られたものである。調査は、1983.8〜1984.11にわたり一地点四日間で行った。

1.熊本県下益城郡砥用町[※3]　2.八代市高田　3.阿蘇郡阿蘇町的石　4.玉名市石貫　5.本

渡市本渡町[※4] 6.佐賀県佐賀市本庄町　7.長崎県西彼杵郡長与町本川内郷[※5] 8.島原市北・南千本木町

この8地点で得ることのできた数量関係の副詞語彙の総語彙は563語である。ここには、イッパイから音変化によって派生したイッピャ、イッペーなどもそれぞれ一語としている。

一、意味構造の観点

(1)意味構造の枠組

数量関係の副詞語彙の意味構造の枠組は、拙稿「熊本県下益城郡砥用町方言の程度副詞語彙の構造—数量関係の副詞語彙を中心にして—」(1987『国文学攷113号』)に提示している。この枠組は他の7方言にも共通している。これを見ると複雑な様相を見せており、意味分野相互に共通性と差異性とが存していることが分る。

<数量の全><数量の多><数量の少>の三つの意味分野ともに、「抽象性の高いもの」と「具象性の高いもの」の対立を見出すことができ、<数量の多><数量の適当><数量の少>は、いずれも「程度性の強く認められるもの」と「情態性の強く認められるもの」の二極がある。<数量の全>と<数量の無>は、全体を「一とみなす」「異質な個の集合とみなす」の二つの方向を持つ点で同一である。<数量の多>と<数量の少>は全体の構造がよく類似している。<数量の無>は否定叙法と共起するのであるが、同様に<数量の少>に「そのままの形態でもっぱら否定叙法を限定・修飾するもの」がある。

一方、差異性として、<数量の全>には「存在性の高いもの」があり、<数量の多>には「全を前提とするもの」がある。<数量の少>は、肯定叙法と共起するものがある一方に、「そのままの形態でもっぱら否定叙法を限定・修飾するもの」が存立している。<数量の適当>はその構造が簡素であることが特徴となっている。

以上のことは、「数量」というものを捉え、表現する視点や手段が多様であることを物語っている。これは修飾発想の重層性の反映と見られる。特に、<数量の多>が複雑になっていることが注目される。<数量の多>への言語主体の関心の強さが指摘されよう。

(2)「抽象性の高いもの↔具象性の高いもの」の関係

意味構造の枠組として、<数量の全><数量の多>で「程度性の強く認められるもの」について「抽象性の高いもの」「具象性の高いもの」という二つの意味項目を設定した。しかし、数量関係の副詞語彙の全体を視野に置いたとき、意味項目相互は勿論のこと、一々の語詞の相互にも、抽象度の違いが見られる。<数量の多>の代表的な語詞を例にして考えてみる。最も抽象性の高いものは、数量程度だけでなく、状態程度にも関わることができる。エライ、ソーニャは数量程度を表すとともに、文例のように状態程度をも表し得る。[※6]

○キョーワ　エライ　サミー　ナ　ー(阿蘇)　今日はたいへん寒いなあ。

○キョーワ　ソーニャ　ヌッカドン　ドギャ　シトッ　カー。(長与)

今日はとても暑いけれどもどうしたのだろう。

さらにエライとソーニャを比べると、ソーニャが冷静な判断に基づく表現であるのに対して、エライは驚き、揶揄などの感情を伴う表現となる。非常に類似した意味・用法を持つ二

語であるが、喚情的な特徴を持つ点でエライがより具象性が高いと言えよう。

イッピャ、ヨンニュ、ゾンブンはエライ、ソーニャが状態程度をも表し得るのに対して、もっぱら数量程度のみを表す点で具象性が高い。

○ミギャ　イタラ　タニャ　イーッピャ　イットッタ。（玉名）

見にいったら田にはたくさん（水が）入っていた。

○ジブントコノ　ホーゲンデ　ヨンニュ　ハナサットジャ　ナカロー　カ。（本渡）

自分のところの方言でたくさん話されるのではないだろうか。

イッピャ、ヨンニュは、係り助詞「ワ」を下接することができる。ヨンニュは比較概念を持っている点でイッピャよりもさらに具象性が高い。ゾンブンは飲食の量について用いられることが多く、その制限を持たないイッピャ、ヨンニュの方が抽象性が高い。

○モー　ゾンブン　ゴッツォン　ナリマシタ。（本渡）もう十分に御馳走になりました。

また、ガンブリは「水などの液体が容器などからこぼれるほど多い情態」について用い、ベッタリは、「個々のものがすきまなく多い情態」について用いる。

○シオノ　ガンブリ　タマットッタ。（本渡）潮があふれるほど満ちていた。

○ミカンノ　ユー　フトッテ　ベッタリ　ナットル。（長与）

蜜柑がよく成長してすきまなくたくさん生っている。

これらは特定の情態と強く結び付いているものであり、具象性の高いことが明らかである。

さらに、副助詞「シコ（シコロ）」、比況の助動詞「ゴト（ゴツ、ゴテ）」によって仕立てられるクサルシコ　バッチャガヤスゴトは、「腐るほど」、「ひっくり返すように」というようにある事態を基に数量を表している。

○ヤラ　クサルシコ　キモン　キトン　ネ。（砥用）君はたくさん着ものを着ているね。

○バッチャガヤスゴト　コドンガ　アソンドッタ。（玉名）たくさん子供が遊んでいた。

さて、<数量の無>を除く、四つの意味分野ごとに整理したものが表1である。

表1

	<数量の全>	<数量の多>	<数量の適当>	<数量の少>
大		ソーニャ　エライの類	チョード	チットスコシの類
抽象度	ゼンブ　ソーヨの類	イッピャ　ヨンニュの類		
	ゴロット　スッペリの類	ガンブリ　ベッタリの類	ガッツリ　ギッツリの類	
小		ヤマンシコ　ウマンクーゴトの類		ハナクソンシコ　シルシアルゴテの類

以上見てきたように、「抽象性の高いもの↔具象性の高いもの」の関係といっても、その関係は単一ではなく、共起関係、置換の可能・不可能、用法、使用できる場面の広狭など性質の異なるものを包含している。その為に数量関係の副詞語彙にいろいろな事態に対応できる弾力性をもたらしていると考えられる。

(3)程度性の差異

多くの語詞が認められる一つの理由として、より程度性の高いものを指向する傾向を指摘することができる。一々の意味項目に所属している語詞相互にも程度性に差異を認めることができるのである。<数量の少>では、スコシというよりも、チョボット、チョビットという方がより少ないことを表す。さらにハナクソンシコとなれば、はなはだ少ないことになり、

批難の気持ちがそこにこめられる。<数量の無>では同じく無いことを表現する場合に、チットンよりもイッチョンが「無い」という感じがするのである。

程度性を高める方法としては、それまである語形を利用するやり方と別の語形を造り出すやり方の二種類がある。前者について述べる。

第一音節を長呼することによってその程度性を高めることができる。例えば「ミーンナゼーンブ　イーッピャ、ヨーンニュ　チーット……」といったものである。これは臨時的なものであり、語形としては固定していない。

また接頭辞を用いていることがある。イッピャ（イッパイ）の語頭に「ホ」「ハラ」「メ」を置くことによって、ホイッパイ、ホイッピャ、ホイッペ、ハライッパイ、ハライッピャ　メイッパイという語詞やゾンブン（ドンブン）の語頭に「ハラ」が置かれハラゾンブン、ハラドンブンが造り出されている。これらはイッピャよりも程度性が高くなっており、<限界まで>というような語感がある。

○ミカンバ　ホイッピャ　モッテ　イカシタ。（八代）蜜柑をたくさん持って行かれた。

○ハライッパイ　ヒトノ　ワルクチバ　ユーテ　キタ。（砥用）
　十分に人の悪口を言ってきた。

○キノー　ミンナト　メイッパイ　タベタ。（阿蘇）昨日、皆とたくさん食べた。
　本渡方言では、イッピャの語頭に「セイ（精）」を置いて、「セッピャ　セッパ」が出来ている。

○セッピャ　モロテ　キタ。（本渡）たくさん貰ってきた。

熊本県南部方言に属する八代方言、本渡方言では「バッカイ（バッカッ　バッカ）」を下接させて程度性を高めた語詞がある。ヨンニュバッカイ、ヨンニュバッカッ　ヨケンバッカッ　セッピャバッカイ　エットバッカッ　タイソバッカイである。

○エットバッカッ　ツッテー。ソゲナ　クイキラーン　ゾー。（八代）
　たくさん（魚を）釣って。そんなに食べられないぞ。

砥用町方言では、ホーラツに「クソ」を下接した「ホラクソ」がある。これになると、単に程度性が増すばかりでなく、批難の気持ちが加わる。

スッペリが類音反復されて、スッペコッペとなると、これもまた程度性が高くなる。

○ドーンコン　デケンゴツ　ソコリャアタリャ　スッペコッペ　モッテハッテタ。
　（玉名）どうにもならないほど、そこらあたりは一つ残らず持っていった。

ここに、修飾発想法の特徴の一つとして、より強い言い方へ赴く傾向を指摘できるのである。そして程度性が高まると、そこに批難の気持ちが加わることが多くなる。

(4)負の評価を伴うもの

数量関係の副詞語彙を用いての数量の認識・表現には言語主体の評価が加わっているものがある。次の文例において、ソーヨとベラリは共に<数量の全>を表している。このベラリをソーヨに置き換えることは可能である。しかし、反対にソーヨをベラリに置き換えると、不自然である。それはベラリが事態に対しての負の評価を伴っているからであると考えられる。

○タウエバ　ソーヨ　シモタ。カシェドノ　オーカッタケン。（玉名）
　植田えを全部終えた。手伝いが多かったから。

○ウッカリ　シトッテ　ベラリ　クサラカシテ　シモーテ。（長与）
うっかりしていて、一つ残らず、腐らしてしまった。

このような事態に対しての評価は、評価に関わらないものを中心に、正の評価を伴うものと負の評価を伴うものの二つの方向に分れている。この二つの方向のうち、正の評価を伴うものは、<数量の全>のウツクシュー、キレーニの2語、<数量の多>のヨカシコ（ヨカシコロ）、エーシコ（イエーシコ）、イーシコロの5語と<数量の適当>のカッタル（カッタリ、カッター）の3語の10語だけである。一方、負の評価を伴うものは、<数量の全>のガッサリ、ゴロット、ゴソット（ゴソッリ）、コロット、スッペリ（スッペコッペ）、ベラリ（ベラー、ペラリ）…など21語、<数量の多>のイサギュー（イサゲ）、ヒドー（ヒデー）、ムゴー、オソロシュー、エッダシー（イエッダシー）、キショークニ、ヨソワシュー、トツケムニャー、カンガムニャー、ホーラツ（ホーラチ）、カンギャーナシ、ホクソー（ホクソニ）、ホッポー（ホッポニ、ホッポホーライ）、ヤタラ（ヤタリャクッタリャ、ヤータラカータラ）、ヤリバナシ（ヤッリパナシ、ヤルカンボ）、ノサンシコ、アクシャウツゴツ…など95語、<数量の少>のハナクソンシコ、キャーナズイモンノゴト…など4語の計120語であり、多くの語が認められる。このように負の評価の方向への傾斜が強く見られる。[※8]

(5)比況的に表わすものの構造

「シコ」「ゴト」を後部要素にもつものについて整理してみる。[※9]次の文例に示した類である。「シコ」は数量を示す副助詞、「ゴテ」は比況の助動詞である。佐賀市方言には「シコロ」も見られる。また「ゴト」は「ゴツ」「ゴテ」となることもある。[※10]

○ウシツルシコ　アリマス　バイ。（阿蘇）たくさん<捨てるほど>ありますよ。

○カキノ　スズルーシコロ　ナットッタ。（佐賀）柿がたくさん<こぼれるほど>なっていた。

○バッチャガヤスゴト　コドンガ　アソンドッタ。（玉名）たくさん<こぼれるほど>子供が遊んでいた。

○コトシャ　モー　オガワンゴト　ミカンノ　トレタ。（長与）今年はもうたくさん<処理できないほど>蜜柑がとれた。

このように「シコ」「ゴト」が下接されることによって多くの表現が造りだされている。そのうち、社会的に慣用されているものについて整理を試みる。「〜シコ（ロ）」が34語、「〜ゴト（ツ・テ）」が56語得られた。その大半は<数量の多>に所属している。<数量の全>では、「ネ（ー）ホッテハ（ー）カラスゴト」（長与方言）を1語得ているのみであり、<数量の少>では、「ハナクソンシコ（ロ）（鼻糞のほど）ハナクソバッカンシコ　スズメンナミダンシコ（雀の涙ほど）スズメンナミダンバッカシコキモチンシコ（気持ちほど）シルシンシコ（印ほど）」「キャーナズイモンノゴト（病人ほど）シルシアルゴト（印にあるほど）」の9語である。ここでも<数量の多>への造語の傾斜を指摘することができるのである。[※11]

この<数量の多>を比況的に表わす90語を、①何に注目しているか、②表現の仕方の二つの観点から整理したものが表1である。複雑な構造をなしていることがわかる。

特に、「言語主体の心情に注目するもの」のなかの「負の方向の心情によってあらわすもの」が栄えていることが注目される。

（表２）

注目の対象	表現の仕方			語　詞
外界の状態の側に注目するもの（26語）	直截的に表すもの（10語）			アーキシャナゴツ〈空きがないように〉 アフルルゴト〈溢れるように〉 アバカンシコ〈入り切れないほど〉 　アバカンゴト シオルゴツ〈折れるように〉 　シオルッゴト スズルーシコロ〈零れるほど〉 　スズルーゴツ バッヂャルルゴツ〈零れるように〉 モリアガルゴツ〈盛り上がるように〉
	比喩的に表すもの（16語）			クサルシコ〈腐るほど〉 　クサッシコ 　クサルシコロ 　クサルゴツ〈腐るように〉 　クサッゴト 　クサルッゴト バカンゴツ〈馬鹿のように〉 フーケモンノゴト〈馬鹿のように〉 ヤマンシコ〈山ほど〉 　ヤマンゴツ〈山のように〉 ウマンゴト〈馬のように〉 ウマンクーシコ〈馬が食うほど〉 ウマンクーシコロ 　ウマンクーゴツ〈馬が食うように〉 ウマクワスッシコ〈馬に食わせるほど〉 ウマンハミクワスッゴツ〈馬の餌に食わせるように〉
言語主体の側に注目するもの（64語）	行為に注目するもの（21語）	積極的な行為によって表すもの（9語）		バジグルゴテ〈ひっくり返すように〉 　バジグリカヤスゴツ 　バチクリガヤスゴト 　バッチャガヤスゴツ 　バッヂャスゴツ ヒックリカヤースゴツ〈ひっくり返すように〉 ウシツルシコ〈捨てるほど〉 バッチカラスゴツ〈散らかすように〉 ホッタラカスゴト〈ほったらかすように〉
		行為が不可能であることによって表すもの（12語）		アバカンシコ〈処理できないほど 　アバカンゴツ〈処理できないように〉 　アバカランゴト 　アバケンゴツ オガワンゴト〈処理できないように〉 サバッキランゴト〈処理できないように〉 　サバッキレンゴト 　サバキエンゴツ イナイキランゴテ〈担うことができないように〉 カカエキラーンゴト〈抱えることができないように〉 モチキランゴツ〈持てないように〉 ラチガアカンゴト〈埒があかないように〉
	心情に注目するもの（43語）	正の方向の心情によって表すもの（5語）		ヨカシコ〈良いほど〉 　ヨカシコロ エーシコ〈良いほど〉 　イエーシコ イーシコ〈良いほど〉
		負の方向の心情によって表すもの（38語）	恐怖の心情（11語）	オトロシカシコ〈恐ろしいほど〉 　オットコシカシコ 　オトロシカゴツ〈恐ろしいように〉 　オットロシカゴツ 　オソロシーンゴツ エズラシカシコ〈恐ろしいほど〉 エスカシコ〈恐ろしいほど〉 　エッカシコ 　エズカシコ 　エズカゴツ〈恐ろしいように〉 　エッダシカシコ〈恐ろしいほど〉
			驚きの心情（5語）	タマガルシコ〈驚くほど〉 　タマガルゴツ〈驚くように〉 　ウッタマガルゴツ エライシコ〈大変なほど〉 イサゲシコ〈大変なほど〉
			嫌悪の心情（12語）	アクシャウツゴツ〈嫌になるように〉 　アクチャウツゴト 　アクシャナカゴツ 　アクシャンゴツ コチャーウツゴツ〈嫌になるように〉 ヤジェラシカゴツ〈嫌になるように〉 ノサンシコ〈嫌になるほど〉 　ノサンゴツ〈嫌になるように〉 　ヌサンゴツ タマランゴツ〈たまらないように〉 キモチノワルカゴツ〈気持ちが悪いように〉 キショクンワルナルゴテ〈気持ちが悪くなるように〉
			常識外れへの批難の心情（10語）	カンガムニャーシコ〈考えもないほど トッケムニャーシコ〈思いもかけないほど〉 　トツケムニャーゴツ〈思いもかけないように〉 　トッツケモナカゴト ホーラツカシコ〈常識をこえるほど〉 　ホーラツカシコロ ホーカラシカシコ〈予想しないほど〉 ゾータンノゴツ〈冗談のように〉 　ドータンノゴツ ホクソンゴト〈常識をこえるほど〉

二、量的構造の観点

（表3）

意味分野・意味項目	語彙量（比率）	代表的な語詞
〈数量の全〉	120 (21.3%)	
A．抽象性の高いもの	17 (3.0%)	ゼンブ　ソーヨ　シッキャ
B．具象性の高いもの	66 (11.7%)	ゴッソリ　ゴロット　スッペリ
C．存在性の高いもの	21 (3.7%)	アルシコ　アッダケ　アルマチ
D．全体を異質な個の集合とみなすもの	16 (2.8%)	ナンデン　ナンモカンモ　ナンチャ
〈数量の多〉	315 (56.0%)	
E．抽象性の高いもの	54 (9.6%)	ソーニャ　エライ　タイギャー
F．具象性の高いもの	99 (17.6%)	ヨンニュ　イッピャ　ホクソ
G．情態性の強く認められるもの	40 (7.1%)	ベッタリ　ガンブリ　グッサリ
H．不定量をあらわすもの	10 (1.8%)	ドシコデン　イクラデン　ナンボデン
I．比況的にあらわすもの	91 (16.2%)	ヤマンシコ　ヨカシコ　クサルゴノ
J．〈全〉を前提とするもの	21 (3.7%)	ホトンド　ダイブン　タイテ
〈数量の適当〉	24 (4.3%)	
K．程度性の強く認められるもの	1 (0.2%)	チョード
L．情態性の強く認められるもの	23 (4.1%)	ガッツリ　ギッツリ　ビシャット
〈数量の少〉	64 (11.4%)	
M．程度性の強く認められるもの	28 (5.0%)	チット　チカット　スコシ
N．情態性の強く認められるもの	5 (0.9%)	タラット　ショボショボ　チョロチョロロ
O．不定量をあらわすもの	2 (0.4%)	イクラカ　イクラジャイ
P．比況的にあらわすもの	10 (1.8%)	ハナクソンシコ　キモチンシコ　シルシアルゴテ
Q．そのままの形態でもっぱら否定叙法を限定・修飾するもの	19 (3.4%)	アンマリ　エット　シカト
〈数量の無〉	40 (7.1%)	
R．余体を否定するもの	16 (2.8%)	ゼンゼン　トント　スッタリ
S．部分を否定するもの	9 (1.6%)	カタカラ　ネッカラ　ネモハモ
T．少量を否定するもの	6 (1.1%)	チットン　チーン　スコシモ
U．一を否定するもの	4 (0.7%)	イッチョン　イッチョデン　ヒトツモ
V．全体を異質な個の集合とみなすもの	5 (0.9%)	ナーン　ナンモ　ナンニモ
総語彙量	563	

＜数量の多＞への顕著な量的傾斜を指摘することができる。

細かくみると、＜数量の少＞＜数量の無＞では、程度性をあらわすものが多くなっていて、＜数量の多＞＜数量の全＞＜数量の適当＞とは、事情が異なっている。同じく数量程度に関わっていても、その関心の度合いに差が見られるのである。ここに、より具象的なも

の、情態性の強い方向に向って発展している様子を認めることができる。

三、語詞の観点

(1)語詞形成法

意味構造を具現的に担っている一々の語詞について整理すると、単一形、複合形、反復形の三種に見分けることができる。

1.単一形（289語）

<数量の全>イッソ　ウツクシュー　カットシュー　ガッサリ　ガッタリ　スッカリ　ヒョロットソーヨ　ボッソリ　ソーチャ　ソーゾツ　シッキャ　ベラット　ヨーットミンナ…<数量の多>アバカン　イサッカ　イサギュー　エライ　イッピャ　エットガンブリ　ギョーサン　シッカリ　ザックラート　ソーニャ　ベッタリ　ホクソ　ムゴー　ヨーケ　ヨンニュ　ヤッチャ…<数量の適当>ガッサイ　カッタリ　ギッチリ　チョード　ピシャリ…<数量の少>オロ　キモチ　スコシ　チカット　チキット　チビット…<数量の無>イッコー　キレン　トント　センゼン　スッタリ…

2.反復形（50語）

(1)同音反復形（10語）

<数量の適当>ガッツガッツ　ガッチィガッチィ　ギチギチ <数量の少>カーツガツショボショボ　チビチビ　チョボチョボ　チョロチョロ　ポチポチ<数量の無>イヨイヨ

(2)類音反復形（40語）

<数量の全>アルギリコルギリ　イッサイガッサイ　スッペコッペ　ナンチャカンチャナンデンカンデン　ネカラハカラ…<数量の多>アバレコボレ　ヤタラクワタラ　ヤチャクワチャ…<数量の適当>ギッツリガッツリ　ギッツリカッツリ<数量の少>チットソット　チットヤソット　チットヤソットヤ<数量の無>エダモハモ　エモハモ　ネッカラハッカラ

3.複合形（136語）

複合形のうち、助動詞、助詞を後部要素にとるものについて整理すると、以下のようである。

a.「ゴト（ゴツ、ゴテ）」をとるもの（56語）

ネーホッテハーカラスゴト　アクシャウツゴツ　アバカランゴト　エズカゴツ　ゾータンノゴツバッチャガヤスゴツ…

d.「デン（デモ）」をとるもの（14語）

ナンデン　イクツデン　ドイシコデン　ナンボデン…

c.「チャ」をとるもの（2語）

ナンチャ　ドシコチャ

d.「ン（モ）」をとるもの（10語）

イッチョン　チットン　ナーン　ヒトツモ…

e.「シコ（シコロ）」るとるもの（39語）

アルシコ　アバカンシコ　ヨカシコ　ハナクソンシコ…

f.「カラ（カルカリカツ）」をとるもの（15語）

カタカラ　カタッパシカラ　ネッカリテンカラ…

g.「バッカイ（バッカッバッカ）」をとるもの（6語）

ヨンニュバッカイ　ヨンニュバッカッ　ヨケンバッカッ　エットバッカッ　タイソバッカイ　セッピャバッカイ

単一形のものを中心にして、反復形のもの、複合形のものなど種々の形態が見られる。同音反復形のものが<数量の無>の一語を除いて<数量の適当><数量の少>に集中していることが興味深い。[※12] 形態の差異は語義的特徴の違いばかりでなく、微妙な喚情的特徴の違いをも担っている。例えば、<数量の全>の「ナンデン」と「ナンチャ」は、後部要素の「デン」「チャ」の違いであるが、「〜チャ」の方が軽い語感をもつのである。

(2)語種

（A）出自

語詞形成法で分類したもののうち、「シコ」「ゴト」を後部要素に持たないもの460語を、今、語種の観点から見ると、①漢語出自のもの、②和語出自のもの、③オノマトペ出自のもの、の三種に見分けることができる。それぞれに所属する代表的な語詞を意味分野ごとに示すと以下のようになる。

①漢語出自のもの（96語）

<数量の全>　ゼンブ（ジェンブ）≪全部≫　ソーヨ≪総合・総様≫　シッキャー≪悉皆≫　ソーチャ≪総体≫　イッソ（イソ）≪一双≫　イッセキ（イッシェキ）≪一跡≫　ヤザイガッサイ≪家財合財≫　イッサイガッサイ≪一切合財≫…

<数量の多>　イッピャ（イッパイ　イッペー）≪一杯≫　ヨケイ（ヨケー　ヨケン　ヨーケ）≪余計≫　ギョーサン≪仰山≫　ホーラツ≪放埒≫　ゾンブン（ドンブン）≪存分≫　ホーガイ≪法外≫　タイソー≪大層≫　ゴーギ（ゴーギュ）≪豪気≫　シゴク≪至極≫　キショークニ≪気色に≫　ウバンゲナー≪大番外≫…

<数量の少>　タショー≪多少≫　ショーショ≪少々≫

<数量の無>　ゼンゼン（ジェンジェン）≪全然≫　イッコー≪一向≫　イッチョン≪一丁も≫…

②和語出自のもの（169語）

<数量の全>　ウツクシュー≪うつくしく≫　スベテ　ネコソギ≪根こそぎ≫　ミンナ（ミナ）≪皆≫　アルマチ（アリマチ　アンマチ）…

<数量の多>　ヨンニュ（ヨンニョ　ユンニュ）≪世に良う≫[※13]　イサギュー（イサゲユー　イサゲー）≪潔く≫　エライ（イエライ　エレー　エロー）≪偉い≫　ゴツー≪ごつく≫　オモサン≪思う様に≫　アバカン≪さばかぬ≫…

<数量の少>　スコシ≪少し≫　アマリ（アンマリ　アンマル）　キモチ≪気持ち≫　シルシ≪印≫…

<数量の無>　マルデ（マッデ）　スコシモ　イヨイヨ　キレン≪きれいに≫…

③オノマトペ出自のもの（169語）

<数量の全>　スッパリ　ゴロット　コロット　ゴソット　ゴーィト　ベラリ…

<数量の多>　エット　ウント　ウントコセ　クー　ガンブリ　ベッタリ…

<数量の適当>　チョード　ピシャリ　ガッツリ　ギッツリ　マッポシ…

<数量の少>　チット　チカット　チョコット　チョボット　チョクット…

<数量の無>　チットン　スッタリ…

三種のものの語彙量を示したものが表4である。存疑のものは除いている。[※14]

表4

意味分野＼出自	漢語	和語	オノマトペ	計
<数量の全>	17	44	37	98
<数量の多>	70	82	67	219
<数量の適当>	0	0	23	23
<数量の少>	2	14	40	56
<数量の無>	7	30	2	39
計	96	170	169	435

このように漢語、和語、オノマトペの三種がある。このうち和語とオノマトペ出自の語詞[※15]が漢語出自の語詞に比べてやや多いようである。[※16]漢語出自のものは、数量を抽象的、概念的に捉え、表現しようとするものが多い。これを全国共通語と比べると、オノマトペ出自のものの多いことが特徴的である。これは数量をより具象的、感覚的に認識・表現しようとすることの現われと考えられる。その端的な例として、<数量の多>の「エット　ヤット　ヤート　ウント　ウーントコ　ウーントコセ　ウーントコシェ　ヤッチャ」など掛け声を基に造語されたものをあげることができる。

また意味分野別にみると、<数量の多>では三種のものがほぼ同じ比率であるのに対して、<数量の全>では和語とオノマトペの比率が漢語に比べて高く、<数量の無>では和語の<数量の適当><数量の少>では、オノマトペ出自のものの比率が極めて高い。これは、意味分野ごとに数量の捉え方、表現の仕方が異なっていることを反映するものと思われる。

（B）転成

数量関係の副詞語彙を構成する語詞は、他の品詞からの転成によるものが多く認められる。その転成の様相にも修飾発想法の一端が見られる。ここには、名詞、代名詞、動詞、形容詞（形容動詞も含む）がある。

1.名　詞　　キモチ　ココロモチ　シルシ…　(2)Aで漢語出自としたもの…

2.代名詞　　ソーニャ（ソーン　ソホーニャ）　サーン

3.動　詞　　アバカン　オモサン

4.形容詞　　キレーニ　キレン　ウツクシュー　エライ（ｲエライ　エレー　エロー　エラヤー）　イサギュー（イサギユ　イサギー　イサゲー）　ヨー（ユー）　イサッカ　／エッダシー（ｲエッダシー）　オソロシュー（オッソロシュー　オッソロシ）　カンガムニャー　ゴツー　スゴク　モノスゴク（モノスゴー）　トツケムニャー（トツケンニャー）　ヒドー（フドー　ヒデー）　ムゴー　ヨソワシュー　オブー　ホーカラシュー（ホーゲラシュー）

量的には、名詞転成、形容詞転成が多い。名詞転成のものは漢語出自のものが大半を占めている。形容詞転成のものは、「イサッカ、エライ（ｲエライ　エレー　エロー　エラヤー）」を除いて、いずれも連用形である。イサッカは<（老人などが）達者で元気のよいことや、数量の多いことを表す>形容詞であり、その終止・連体形の語形のままで副詞化している。

○ウベノ　イサッカ　アン　ネ。（玉名）木通がたくさんあるね。

形容詞からの転成について、一体どのような意味・用法を持つものから数量関係の副詞語彙になったかを考えてみる。そのもとの意味・用法がその語形と現在併用されている意味・用法から推しはかることのできるもので見てみると、正の意味を持ったものと負の意味を持ったものの二つに大きく分けることができる。正の意味を持つものとしては、「キレーニ〜イサッカ」などである。その一方、負の意味を持つものには多くの語詞を指摘することができる。「エッダシー〜ホーカラシュー（ホーゲラシュ）」の一連の語詞である。このことは<数量の多>の比況的に表わすものの構造のところで指摘した、「負の方向の心情によって表すもの」が栄えていることと同一の傾向である。

(3)音的側面

どういう音が好まれる傾向があるのか、このことも修飾発想法を考える上で大切である。※17 <数量の少>を見ると、第一音節が「チット、チカット、チキット、チビット…」のように「チ」であったり、「チョコット、チョビット、チョボット、チョロット…」のように拗音の「チョ」であるものが多い。<数量の適当>では、「ガッツリ、ガッサイ、ギッツリ…」のように濁音のものや、「ピシャット、ピッタシ…」のように半濁音のものが目立つ。<数量の多>の「情態性の強く認められるもの」も「ガッポリ、ドッサリ、ベッタリ、ボッソリ…」のように第一音節が濁音のものが多い。これらの語詞がいずれもオノマトペ出自であることと関係している。

おわりに

以上、数量関係の副詞語彙の認められる修飾発想法について、意味構造、語構造、量的構造の三つのレベルからその一端を述べた。きわめて多様な語詞がそこにあることが分った。これらは、複雑な客観世界の認識、言語主体の表現欲求を支えているものである。

造語発想法の解明の重要性を痛感しつつも、本稿で試みたその方法は、いまだ十分なものではなく、事実の羅列的な指摘となったうらみがある。それらをいかに統合していくかが今後の課題である。

また、ここで明らかにすることのできた事実は、ひとり肥筑方言だけのものであるのか、他方言との共通性と差異性とを区別していかなければならないし、他の語彙分野の調査を行い、その結果と重ね合わせていくことも今後の課題である。

注

＊1 方言における発想法の研究の重要性に関しては、夙に藤原与一「方言の発想法」（1962『国文学攷28号』）よって指摘され、名詞について、愛宕八郎康隆「国語方言の発想法㈡」（1973『長崎大学教育学部人文科研究報告第22号』）で分析がなされている。藤原与一『民間造語法の研究』（335〜345頁）で、造語心意として「想念の自在さ」「あそび心」「比喩」「直覚直叙」「滑稽感」「批評」「美意識」が挙げられている。また、室山敏昭『地方人の発想法』（1980文化評論出版）に、性向語彙を対象として造語発想の構造が示され、「地方人の造語発想」が「想像力を駆使する方向」と「具象的にものをとらえ、表現しようとする方向」の二つの方向へ発展しているとの指摘がある。（79頁）

＊2 地点に熊本県方言への片よりがあるが、語詞の出入りに多少の地域性が見られる程度で

ある。

＊3 拙稿「熊本県下益城郡砥用町方言の程度副詞語彙の構造—数量関係の副詞語彙を中心にして—」（1987 『国文学攷113号』）参照

＊4 国語学会昭和61年度秋季大会（於鹿児島大学）発表原稿集参照。

＊5 拙稿「佐賀県方言と長崎県方言との比較—数量関係の副詞語彙を中心にして—」（1987 『佐賀大国文15号』）参照。

＊6 <数量の多>の「抽象性の高いもの」に所属する語詞である。

＊7 白石寿文「熊本島八代市二見赤松町大平方言小報告」（1970 『国文学攷54号』）に長呼されることによって、敬意度が増すとの指摘がある。微妙な音変化が意味作用と深く関わっている。

＊8 藤原与一は民間造語法の一つの特徴として「命名の下向性」を指摘している。（『民間造語法の研究』（1986 武蔵野書院 395頁）

＊9 宮地裕編『慣用句の意味と用法』（1982 明治書院）に慣用句を形式上の特徴から分類したものの中に、「比喩形式の慣用句」がある。「直喩の形式」と「隠喩の形式」とに分類し、「ものごとを分りやすく、おもしろく言い表すのに有効である」「隠喩は直喩よりも表現としてのおもしろさを持っている」との指摘がなされている。

＊10その地域性については、住田幾子「ゴト、ゴタルに見る九州方言の基質」（1984 『国文学攷98号』）を参照。

＊11中国方言には、「メクソホド<目糞ほど>」という語がある。同様の表し方であるけれども喩えの対象に地域性が認められる。

＊12中国方言では「エットエット、ヨーケヨーケ」のように<数量の多>にも同音反復形が多く見られる。同音反復形が好まれるかどうかに地域性が見られる。

＊13『邦訳日葡辞書』に「Yoniyo ヨニヨゥ(世に良う)非常に.また,良い,すぐれた.（後略）」とある（828頁）。

＊14存疑としたものは、「<数量の全> ソーゾツ カッタ〻カ ーッタシ カーットシュ <数量の多>ホクソ（ホクソ ー ホクソニ ホクソン）ホラクソ ホクト ホッポ（ホッポー ホッポーニ ホッポーホーライ）ヨコロ（ヨコリャ ヨコラン）バサレー（バサルー バサロー バサリュー バーサリャ バサラシュ）メジケ カマジュ」などである。

＊15脇坂公康は、熊本県方言におけるオノマトペを用いた造語法の一端について、「熊本県方言の擬態語・擬声語とその転成造語法」（1967 『言語生活186号』）のなかで述べている。

＊16瀬戸口俊治「鹿児島県指宿郡山川町岡児ケ水方言の程度副詞」（1966 『方言研究年報第9巻』に、中国地方方言に比べて漢語系のものが少なく、和語系のものが栄えているとし、形容詞、動詞、名詞、疑問の成句からの転成が指摘されている。

＊17大橋勝男「方言に方言人の心理を見つめて—関東域方言に見られる語詞形成法—」（1984 『方言研究年報 第26巻』）の中で、関東域方言の「音的効果本位の接頭辞」に促音、破裂音、破擦音を好む傾向が指摘されている。

付記 成稿に際し、室山敏昭先生には懇切な御指導を賜わった。調査では多くの教示者の方々にお世話になった。ここに記して心から御礼申し上げる。

（博士課程後期3年）